

## M氏ノ運転シタ風景ノ記憶③

スーと滑るように、そして静かに山形新幹線「つばさ」は福島駅を後にした。

「つばさ」は、新幹線なのに奥羽本線の線路を走る。昨夜の雪は、朝のうちに解けてしまった。二十分ぐらいぼんやりと車窓を眺めていたら、父と母の通った小学校が近づいて来た。学校帰りらしい男の子二人がこちらを指さしている。二・三年生だろうか。しつかりとしたオーパーを着込み、マフラー・手袋・耳あてが鮮やかだ。そんな光景を見ながら、なぜか急に父を思い出した。

「峠の力餅買ってきたぞ」

そう言つて父はドサツと箱を置いた。僕が小学六年生の頃、月に二回ぐらい奥羽本線の運行に関わつていた。〈峠の力餅〉は板谷峠にある峠駅のお土産である。その峠は、日本の鉄道三大峠と言われるほど険しいことで有名だった。力餅を口に頬張つたまま、

「正機、汽車はゆるぐしか曲がれない。少しずつしか登れない。何でだかわがるが？」

「汽車は長ぐで重いがらだ」

と自分で質問して自分で答えた。そして、いつものように詳しく山をどう登つていくかを説明していたが……。もうまったく記憶にない。

僕に乗つた山形新幹線は、今まさに奥羽山脈を登ろうとしていた。さつきまでは雪はまったくなかったのに、気がついたらかなり積もっていた。しばらくすると、大きなU字カーブに差しかかった。緩やかに大きな円を描くように曲がっていく。そして「つばさ」は、奥羽山脈をゆつくり登っていく。